

少子化対策とエコチル調査

稲 寺 秀 邦



公衆衛生の課題はいろいろありますが、皆さまにとって最も重要な課題は何でしょうか。何をトップにあげるかはそれぞれの立場で異なると思いますが、最も重要な課題のひとつは、少子高齢化、人口減少に関連する事項であることに異論はないでしょう。

国は2007年8月より、少子化担当の内閣府特命大臣を選任して、この問題に積極的に取り組んでいることをアピールしていますが、有効な対策は立てられていないのが実情です。このままの状態が続けば、国としての体をなさなくなる現状を前にして、手をこまねいているわけにはいきません。一人一人が小さなことでも、何らかの貢献ができないかを真剣に考えるべきです。私たちが現在関わっているエコチル調査は、少子化対策に貢献できると信じています。

エコチル調査は、正式には「子どもの健康と環境に関する全国調査」と言います。エコチルのエコは、エコノミー (economy) のエコではなく、エコロジー (ecology) のエコです。チルはチルドレンのチルです。エコチル調査の目的は、環境要因が子どもの健康にどのような影響を与えるかについて明らかにし、安全・安心な子育て環境を実現することにあります。

エコチル調査は全国で10万人の参加登録をめざして、2011年1月より全国15ヶ所の拠点でリクルートが始まりました。リクルート予定期間の2014年3月末までに、全国で約10万名の妊婦さんに参加していただき、

2014年7月31日現在、87,913名のエコチルベビーが誕生しています。富山県では5,584名の母親が参加し、4,753名のエコチルベビーが誕生しています。

エコチル調査では、何故10万人が設定されたのでしょうか。10万人が切れのいい数字であるという理由だけではありません。私たちはいろいろな調査を行う時、何名の人たちを解析すれば、当初の目的を達成できるかを見積もります。10万人では、0.1%程度の比較的頻度の低い疾患でも、原因となる環境要因を解析することが期待できます。0.1%以上の発症がある疾患として、性同一性障害、停留精巣、自閉症、ぜん息、ADHD（注意欠如多動症）、アトピー性皮膚炎等があります。これらの疾患は近年増加していることが報告されていますが、環境要因がどれだけ関連しているかについては未知数です。

例えば、ここ数十年の間に子どもたちのアレルギー疾患が急増しました。経済成長が著しい他国においても同様の傾向がみられていることから、経済活動の発展にともなう変化、生活様式や食習慣の変化など、現代文明に特有の何らかの環境要因がアレルギー疾患の増加に関与していることが考えられます。

子どもは、種々の環境要因に対する感受性が高いことが知られています。特に胎児や乳幼児の臓器は脆弱であり、環境要因により様々な健康影響を受けやすいのです。子どもの健全な発育を守るためには、種々の環境要因が、子どもの健康に及ぼす影響について明らかにし、その成果を環境政策に反映させることが必要です。

エコチル調査では、環境要因が子どもの健康に与える影響を調べるため、子どもが

生まれる前から13歳になるまで、長期間にわたり追跡させていただいています。この過程でいくつかの疾患の診断を受けた子どもを対象として、かかりつけの医療機関から、病状についての医学的な情報を提供いただくための調査（疾患情報登録調査）も開始されています。

エコチル調査は、未来の子どもたちにすこやかに育つことができる環境を贈るためのプロジェクトです。エコチル調査の結果を環境政策に反映させ、子育てしやすい環境の創出につなげれば、少子化対策にも役立つものと期待しています。

（富山大学班）